

電子化の利点と問題点

高倉 直

(東京大学・長崎大学名誉教授)

1. はじめに

E-ジャーナルの利点については近年の自分の経験をもとに、前回かなり詳しく述べた(高倉, 2017)。この2年間も同じ方向ですすめており、幸いにも私が選んだ国際誌のIFは急激に高まり高い値を維持しているし(JAA, 2019; IF=5.128 (2018)), 査読を依頼される論文数も増える一方である。世界的にE-ジャーナル化の流れは変わらないようである。投稿は原則として、英文はこの国際誌に決めている。和文は研究論文的な内容のものも含めて、読者が幅広い、農業および園芸に投稿することにしている。

終活の一環として、寄贈されてくる学会誌はすべて辞退し、手元に残っているものはすべて寄贈した。あとはまだ手元に残っている50冊以下の書籍と写真集の処理、残っているスライドのデジタル化をすませなければならない。

研究論文でない、今までに書いた総説等のCD化をして、配布することを検討していたが、もらった方としては、書籍より廃棄処理がしやすいとはいえ、それなりに負担をかけることになるし、このところまだ投稿が続いており、今年になってからも、すでに4報が上梓されており、さらに学会からの特集の依頼原稿も近々できあがり、先日の北京での講演内容もあるので、どこで区切りをつけるかが難しい状況となっている。そこで、マイクロソフトのOneDriveへのアップロードを思いついた。無料であり経済的で、かつデータの更新が容易で、次々に追加できるし、IDとパスワードを連絡すれば、だれでも自由に読むことができ、手元に何も残らない。これこそが、終活時点でのまとめ方の最適な方法ではないかと考えた。

ここではこれらの経験から、気が付いた点を述べてみたい。

2. PDFの画質

E-ジャーナル化されたものは、国内誌に関しては多少の遅れはあるものの、J-stageのサービスが利用できる。また、東京大学は名誉教授へのサービスとして、キャンパス外から多くの海外の雑誌にアクセスできるようになった。かなり古いものもPDF化されている。もしどうしても元の雑誌がみたくれば、東京大学OPAC(Online Public Access Catalog)で検索して、どこの図書館にあるかを確認して、その図書館に行く必要がある。農学系の古い雑誌の多くは現在、農学部ではなく、柏キャンパスの図書館に所蔵されているので、注意しなければならない。E-ジャーナルで同じものを見ることができると、元の雑誌を見ることがなぜ必要かということであるが、それはPDFの画質が良く

ないからである。デジタル化が進んでからの雑誌では問題ないが、古いものは雑誌から画像として取り込んでおり、図や表の小さい添え字が鮮明ではない場合が多い。海外、国内どちらも同様である。

3. J-Stageの分類

国内の多くの学会誌がJ-stageで利用できるようになって大変重宝しているが、読みたい学会誌でまだ利用できないものもある。学会のほうでテンプレートに沿って準備すれば費用も掛らずに、登録されるようであり、学会事務の負担にはなるが、是非進めてもらいたいものである。

当学会ではすでに生物と気象という和文誌がE-ジャーナルとなっており、そのうち研究論文と総説などはJ-stageでも見ることができる。最近、パスワードも不要で、すべての記事を読むことができるように改善されたのは嬉しい。ただ、残念なことは、最近の生物と気象には、創刊当時はあった、本会記事という項目がなくなり、理事会議事録はまったく公表されなくなっている。それまではかなり詳細な報告があり、学会の動向や将来方向などを知ることが可能であった。

また、古い学会誌では、学会誌にはすべての記事が掲載されているが、J-stageへの登録は一定でなく、その基準が明確でない。研究論文は問題なく登録されているが、それ以外のものは、資料や総説、シンポジウム報告などの取り扱いが必ずしもはっきりしていない。いまからでも修正ができるのであれば、和文誌が発行される前のものについては見直して、学会記事、支部報告、抄録、書評などを除いたすべてを登録することが今後のためには必要であろう。

私が利用しているE-ジャーナルでは、上梓された古いものでも、誤りに気が付いて連絡すれば、即座に訂正が行われる。

4. おわりに

まだ手元に残っている書籍の中には、著書が数冊ずつある。アマゾンでの値段を調べたところ、英文のものについては、特に高い価格がついている。狭い専門分野のもので、その理由が理解できない。大方の研究機関や関係者には寄贈したので、今後どうするかちょっと悩ましい。

先日、論文PDF鮮明度が悪く、原本を調べるべく、柏図書館へ出向いた。我が家からは本郷より近いのでありがたいが、論文数ページのコピー代は本郷では現金で払えるのに、ここでは現金ではだめで、生協で1,000円のカードの購入を促された。スマホでのコピーも許されないという。スマホでもコピー機の使用と同じように、コピーした雑誌名、巻号、ページ数などを登録すれば、問題ないはずであるが、理由がよくわからなかった。

終活のもう一つの課題は、いただいた賞牌の処分である。

すでにご存じのように当学会賞の賞牌に関しては、財政節約の点からも、当時の学会長と相談して、過去の受賞者に呼び掛けて、賛同いただいた人に、学会に寄贈していただいた。学会への寄贈のお願いに対して、返事のない人や段ボールの中にしまっているけれども寄贈できないという人もいた。当時の詳細な報告があるが(広田, 2016), その後も、こうして集まった古い賞牌と新しく作られた賞牌とが、受賞者の希望に応じて授与されており、古い方は有名な作品であるために市場価値も高く、人気があるようである。同じような方式を日本農学会にも提案しようと思っているが、日本農学会の財政状態も知らず、また昨今、役員にも

知り合いがいなくなっており、どのような手づるで話を持ち出すかが一番の問題かもしれない。

引用文献

- 広田知良, 2016: 佐藤忠良と日本農業気象学会賞の賞牌および個人的な体験. 生物と気象, **16**, H3-4.
Journal of Advances in Agriculture, 2019: <https://rajpub.com/index.php/jaa/about>
高倉 直, 2017: Open Access International E-journal. 生物と気象, **17**, 75-76.